



志度高だより 一飛翔の窓一

第109号
(H22.9.24)

「ボクサー」

こいつは強い。久しぶりに強いボクサーが出てきたと思う。彼の名はスーパーフェザー級チャンピオン、内山高志。

このチャンピオンを私が買ったのは、単にボクシングが強いというだけではない。彼には謙虚な態度、そして何より周囲の人々に対する感謝の気持ちがある。勝って奢らず、さらに高見を目指す彼の生き方は、かつて日本人が理想としていた古風な生き方である。彼の日常生活を見て、もし若ければ私も彼のように果敢に人生に挑戦してみたいと思った。男は強さを求める。それが男の血というものだ。彼は世界チャンピオンになった今、さらに自分に磨きをかけるべくストイックに生きている。彼の母親は言う。「ごく普通の子ですよ。礼儀正しくて優しい」、と。

そんな彼がどうして過酷なボクシングの世界に身を投じたか。彼は高校からボクシングを始めた。そして高校チャンピオンになり、大学に進学して大学チャンピオンになった。順風満帆。ところがアジア大会で惨敗する。そのとき世界は広いと実感し、今後の自分の才能に疑問を持ち引退。その後、サラリーマンとして平凡な日々を送る。しかし煮え切らない自分がいた。ある日、テレビをつけると同僚がプロで華々しく活躍していた。その姿に闘争本能がむくむくと目覚めた。



彼は再びハングリー精神の権化となりトレーニングを開始。ワタナベジムの戸を叩き、プロとしてのキャリアを積んでいく。毎日寸分違わぬ日課の繰り返し。ウェイトコントロールのため、食べるものも同じ。そうやってひたすら練習に明け暮れ、めきめきと力をつけ世界チャンピオンになった。母親の「ごく普通の子ですよ。礼儀正しく優しい」という言葉からは想像できない過酷な道を歩んでいる。いったい何がそうさせるのか。これは想像だが、アジア大会の惨敗で、謙虚に相手の強さを認めながらも、自分の不甲斐なさに砂を噛むような日々を送っていたに違いない。引退はしたものの納得していなかった。くすぶっていたのだ。

突然だが私はテレビは嫌いだ。特に最近のバラエティー番組は見るに耐えない。視聴率を上げるためだったら何だってやる。倫理もなにもあったもんじゃない。ボクシング界では物議をかもしたK父子がいい例だ。テレビ局のやらせかどうか知らないが、K父子の傍若無人な態度は目に余るものがある。そこに汚れたリングを清めるように内山選手が現れた。青い闘争心を胸に秘め、黙々と練習に励む内山選手はK父子と対極をなす。勝ってコーナーロープに仁王立ちになって「どんなもんじゃい」と叫ぶK兄弟と、「自分はまだまだです。諸先輩のようにもっと強くなりたい」と謙虚に言う内山選手。さてどちらに好感を抱くか。



練習に励む内山選手はK父子と対極をなす。勝ってコーナーロープに仁王立ちになって「どんなもんじゃい」と叫ぶK兄弟と、「自分はまだまだです。諸先輩のようにもっと強くなりたい」と謙虚に言う内山選手。さてどちらに好感を抱くか。

カテゴリーの異なるボクサーを比較するのはフェアじゃない。そう言われるかもしれない。確かにどちらも是認されてしかるべきである。なぜならそれぞれのスタイルがあるから。事実、K兄弟を応援する人も多い。人を食ったような態度が、権力社会を由としない人達には痛快に映るのだろう。たまたま内山選手が私の求める人物像に近いという理由で、危険なことだが私自身彼を最良しているのかもしれない。それでも勝ったときの試合後感が大きく異なるのは何故か。後味がいいか悪いか。また、負けてもよくやったと背中を叩きたくなるのはどっちか。おそらく弁を待つまでもない。

格闘技では、相手に優しくなるのは禁物との考えがある。しかし、内山選手はどういう状況にあっても、母親の言う「優しい子」の部分捨て去ることができないのではないかと。なぜならそれが彼そのものであるから。彼はそういうふうで育ったのだ。あるボクサーが、負けて優しさの意味を知った、と言った。最近はこの「優しさ」があだになっている。甘やかすことと優しさは同じではない。鞭を惜しんで子をダメにするケースが多いが、それは両者を同視するからだ。叱るときには毅然と叱り、褒めるときには心から褒める。子どもも烈火のごとく叱られたら素直に反省するし、褒められたら素直に喜ぶ。

今日も新聞の片隅に悲しい事件が出ていた。親殺し。いじめによる自殺。ひき逃げ。恐喝に詐欺。いったい今の世の中どうなっちゃったんだ。もう直んねえのかよ。悲しいぜ。

ボクシングは人を殴ってお金を稼ぐ。しかし、本当の痛さを知っているのは、殴ったことがあり、また殴られたことがある人間だけだ。内山選手もいつかはチャンピオンの座を追われる。しかし、そのとき爽やかな顔で「ありがとう」と観客に手を振るに違いない。いやーいいチャンピオンだ。